

夢の反収10t獲りに
挑戦しよう!!

高松 求の

高松式
バレイシヨ
栽培指南

準備編

その1

伊勢谷雄二

profile



高松 求氏

1930年、茨城県生まれ。茨城県を代表する農業経営者として多くの人々に影響を与えている。69年竹林で林野庁賞、77年落花生で農林水産大臣賞、98年「土の力を引き出す米づくり、豚の心を読んだ飼養技術、地域の教育を重視した近隣の子供たちへの竹林の開放などユニークな活動」を理由に山崎記念農業賞を受賞。現在も、指導者として若い経営者たちや業界人、研究者にヒントを与え続けている。著書『図解60才からの水田作業便利帳』、関連図書『農業をやるうよ』（坂口和彦著）、『家庭菜園の実際』（大井上康著）。

バレイシヨ反収10t、北海道の平均反収3tの3倍以上。現実離れした収量と決めつけるわけにはいかない。「高松酵素」と独自の培土法を用いた高松式栽培では、1株最大3kgを超えた。反収換算すれば約18t。そこまではむずかしいにしても、10tなら十分目標数量になりうる。

前号で、高松式バレイシヨ栽培法を6名の方に実践していただいたイベントを紹介した(57ページ「イベントレポート」)。その1畝のなかで最も収量があった1株は3・3kg。あくまで机上の話だが、これを反収に換算すると18・8tにもなる。高松氏によれば、1株でもそれだけの収量があったということは、今後の収量目標となる。

バレイシヨはきちんとした栽培管理を行えば干ばつや水害にあわず、確実に最も安心して獲れる作物

だ。北海道のバレイシヨの平均反収が約3tということ、高松式ではその約3倍の10t獲りを目指す。

近年、増収のための面積拡大の動きが顕著だが、効率化のための大型機械導入は、土壌踏圧を生み圃場に悪影響を及ぼすなど、それなりのリスクも増えることとなる。

まずは、今の面積で低コスト、高収量、高品質、持続的という農業の原点に、日本の農業者も挑戦しなければならぬと高松氏は語る。

高松式バレイシヨ栽培とは、高松

求氏が20年の長きにわたり、検討を重ねてたどり着いた「高松酵素」を使い、さらに高松氏が行なっている独自の培土法を用いたバレイシヨ栽培法のことだ。

高松酵素については、次号でその製法など詳しい内容について紹介する予定としたい。

今回の準備編は、4月に種を蒔く品種に、圃場の準備や種芋の管理をどのように行なえば良いのかを説明したい。前年の作業が高松式では最も重要だと高松氏は語る。

1 圃場の準備

表面残渣は11月までに片付けを終わらせる。そしてドライブハローで表面を掛けて雑草を抑える。ドライ

ブハローは整地板を押さえて10cmぐらいの深さで、ゆっくりとしたスピードで丁寧に1〜2回掛ける。

10a当たり2tの牛糞堆肥をマニユアスプレッターで均一に散布する。堆肥は高松酵素の餌となり、これにより肥料は普通の人の半分程度の済むという。そして間を置かずに、高松酵素を10a当たり100kg散布する。そのとき、酵素は風で流されるので、プロキヤスはなるべく下ろして丁寧に散布する。

酵素は肥料と違い、散布の際に重なったり、ずれがあっても、心配はいらない。酵素の菌は横に広がって活動するので均一に成長すること。

風があると、酵素が飛ばされるので、散布後はロータリーで10〜15cmの表面混和をする。11月半ばに霜が

降りるので、それまでに混和を終わらせる。

その後は天候を見ながら、反転がベストにできる時期にプラウ掛けを



プラウ耕による風化



風化後圃場

行なう。このときは、深さ25〜30cmで反転を良くするように丁寧に掛ける。春の南風で土が飛ばされるので、プラウはなるべく東西に掛けることが望ましい。

プラウを掛けたら圃場をそのままにしておき年内の圃場づくりは終わりとなる。

プラウは作物を作って痛んだ上の土を下の方に入れて休ませ、下の方にある固くて栄養のない心土を上に出し、太陽と空気に触れさせる。

これにより、冬の寒さは心土の凍結を作る。上がってきた心土は水分があるので霜でひび割れし、そして、太陽と風で乾き、2カ月で自然に砕け、作土として改良される。そして、風で自然に平らとなる。いわゆる風化現象だ。

また、プラウによる耕起は雑草の種を埋没させるので、効率の良い除草対策にもなるという。

2 種芋準備

種芋は芽の数が多い、小玉・中玉を選ぶ。ここが意外と増収のコツだ。種芋は20kgの袋で送られてくる。12月頃には袋を開けて、芽がはじめているなら、すぐに処理をする。

種芋は、芽が付いているものを重さ30gにカットする。芽のないもの

は50gあってもだめだ。

カットしたら切り口をすぐに消毒するために、溶液に10〜20分浸けて、なるべく早く乾燥させる。

そのときカットした種芋は10kgずつコンテナに入れる。10kgだと軽いので、溶液に浸けるのも、溶液を切るのも楽で、なによりも種芋は太陽に当たりやすくなる。

種芋を10kgずつコンテナに切り口を上にして並べて干す。そのコンテナを2段、3段と重ねる。この10kgずつのコンテナは光を通すので早く乾くそうさ。

種の健康的な干し方は普通の天候



種芋

で3日だという。3日で切り口が平らで縁が少しへこむ状態、いわゆるキュアリング状態となる。これが発芽に良い健康な種芋の状態だ。

種はずっと置いておくと、しぼんでしまう。しぼむ前に蒔くことが大切だが、天候でそうもいかないときがある。その場合も良い状態を保つことが大切。

雨などで蒔く時期が遅くなる場合は、ブルーシートを掛けて、光が当たらないようにして乾燥を抑える。ただし、その場合通気性は必ず良くする必要があります。

(次号に続く)



種芋乾燥